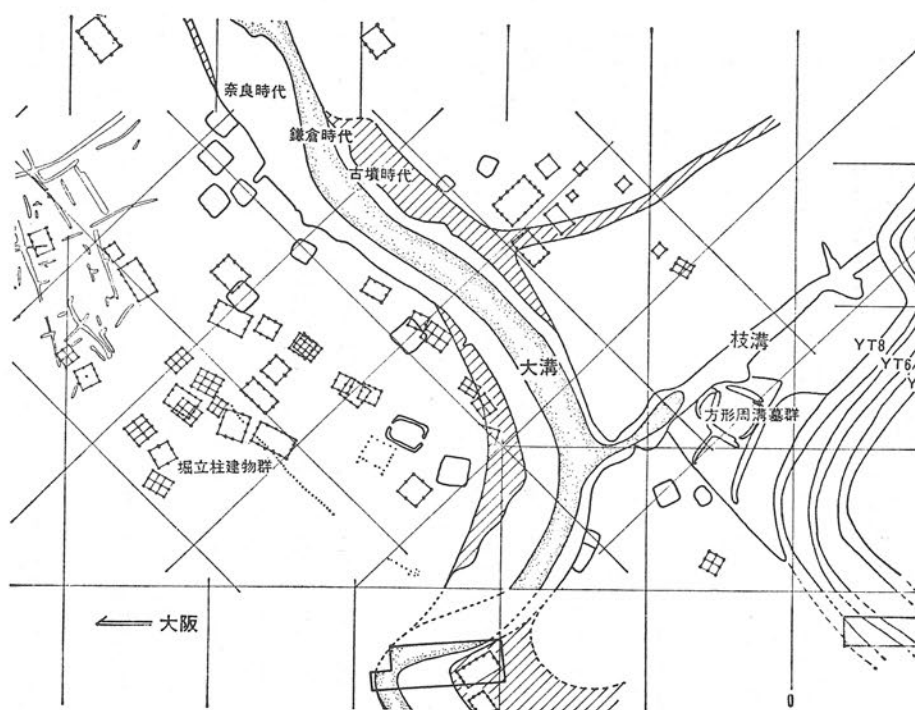


# 静岡・伊場遺跡

- 1 所在地 静岡県浜松市東伊場、浜名郡可美村東若林
- 2 調査期間 一九七七年(昭52)七月～七八年
- 3 発掘機関 浜松市教育委員会
- 4 発掘担当者 斎藤忠・向坂鋼二他
- 5 遺跡の種類 官衙・集落跡
- 6 遺跡の時代 弥生～歴史時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要  
伊場遺跡は、静岡県浜松市東伊場から、同浜名郡可美村東若林にまたがる、弥生時代後期の三条の環濠を備えた集落跡(東部地区)と、おおみぞ「大溝」と仮称した河川の流域に営まれた律令時代の掘立柱建物群(西部地区)とからなる。およそ五万平方米の規模を有する複合遺跡である。

昭和二四年に地元の中学生によって発見され、同年に国学院大学考古学研究室(代表樋口清之教授)による発掘調査を経て、昭和二九年に静岡県により史跡に指定されている。

昭和四三年頃より、東海道線高架化事業に伴い、遺跡が関連用地に含まれたことから、その取扱いが取沙汰されるようになった。そこで浜松市教育委員会では、昭和四三年より昭和四九年までに当該地域内の発掘調査を、東京国立文化財研究所・奈良国立文化財研究



伊場遺跡遺構配置図

大溝は弥生時代には既に存在していたと考えられるが、古墳時代前期の洪水によって、一度は完全に姿を消してしまったものと思われる。そして後に堆積した青色粘土層を基盤として、古墳時代中期後半代に集落が営まれるようになった頃には、幅二〇m前後、深さ二・五m前後の大河となつて、大きく蛇行しながらほぼ南北方向に遺跡の中心部を貫流している。古墳時代の大溝には、流木や粗砂が多く、流れがかなり急激であつたことがわかる。奈良時代になると流れは比較的ゆるやかになつていて、草炭層と粘土層の互層が形成された。多くの木簡はこの粘土層中より検出されたものである。しかし平安時代以降になると、奈良時代大溝を侵蝕しながら蛇行したため、奈良時代の遺物と、平安時代の遺物を混在させる結果となつてゐる。

大溝の流域から検出された掘立柱建物群には、高床式建物と土間造り建物の二者が認められている。現在までに四五棟以上を数えることができ、一定の規則性をもって配列されているようであるが、

西部地区出土遺物の大半は大溝内より検出されたものであり、特に七世紀中葉以降十世紀代に比定されるものが特徴的である。これらには、土器・土製品・石製品・金属製品・木製品・骨角製品および動植物遺体があって、労働用具・生活用具・建物部材・武器・馬具・呪術祭祀用具・その他などに分類できる。これらのうち、木柄付農工具類と、呪術祭祀用具にまとまりをみることができる。

木簡は、昭和五四年八月現在で一〇八点検出した。このうち七十七点については『伊場遺跡発掘調査報告書』第一冊・「伊場木簡」で既に報告した。これらは、A 文書風の記載のあるもの、B 帳簿・伝票の類と思われるもの、C 荷札・付札と思われるもの、D 題籤・呪符・習書などに分けられている。第七八号以下の主釈文を次に記す。

- 32

- (5) 右件人今時過不<sup>(参カ)</sup>来 神龜四年十一月十四 461×37×8 011 85
- (6) 戸人<sup>(戸人カ)</sup> 八<sup>(刻線)</sup> 戸人<sup>(十カ)</sup> 四<sup>(十カ)</sup> 戸人<sup>(十カ)</sup> 四<sup>(十カ)</sup> 戸主語部金 戸人<sup>(呂カ)</sup> 西万<sup>(呂カ)</sup> 四 戸主敢石部麻<sup>(呂カ)</sup> 十四 戸人<sup>(人カ)</sup> 忍勝<sup>(人カ)</sup> 六 戸人<sup>(人カ)</sup> 万呂<sup>(人カ)</sup> 四 戸人<sup>(人カ)</sup> 八<sup>(八)</sup> 語<sup>(敢カ)</sup> 六 (460)×91×11 019
- (7) 己亥年<sup>(三カ)</sup> 月十九日 溯評竹田里人若倭部連<sup>(老カ)</sup> 末呂上為<sup>(五カ)</sup> 持物者馬<sup>(五カ)</sup> 人<sup>(五カ)</sup> 史<sup>(五カ)</sup> 評史川前連<sup>(五カ)</sup> × (305)×39×4 039 108
- (8) 敢<sup>(敢カ)</sup> 一斤 五百<sup>(部カ)</sup> 石道一斤 又<sup>(庸カ)</sup> 石道一斤 麻呂一斤 麻呂一斤<sup>(刻線)</sup> 廣麻呂一斤 石道一斤<sup>(刻線)</sup> 又庸<sup>(乞カ)</sup> 知麻呂一斤<sup>(乞カ)</sup> 二斤 百足一斤 若麻呂一斤<sup>(自カ)</sup> 麻呂一斤<sup>(道カ)</sup> 麻呂一斤 (402)×39×5 019 95

- (9) 「五十代× (162)×14×5 081 96
- (10) 「栗原玉作部真× (104)×39×2 019 97
- (11) 「小文郷<sup>(援カ)</sup> (135)×20×4 019 98
- (12) ×部金<sup>(援カ)</sup> 十八束同部<sup>(援カ)</sup> 女四束 ×部<sup>(援カ)</sup> 万呂 (144)×21×3 051 88
- (13) 「蓋聞駕羽乘× (99)×36×9 019 91
- (14) 「蛭田郷<sup>(多カ)</sup> 部<sup>(多カ)</sup> 志<sup>(原カ)</sup> 320×24×5 051 94
- これらの木簡のほかに、<sup>(原カ)</sup> 駅長・郡鑑取・駅長老・栗原駅長などと記された墨書土器が検出されていることから、伊場遺跡の性格付がある程度なされるものと思われる。

# 9 関係文献

- 浜松市教育委員会 『伊場遺跡第9次発掘調査略報』 一九七七年
- 浜松市教育委員会 『国鉄東海道線線路敷内埋蔵文化財発掘調査報告書』 一九七九年 (川江秀孝)